高校生の月経に関する相談に対しての

養護教諭の臨床判断

―タナーの臨床判断モデルを用いて―

教育実践高度化専攻　児童生徒発達支援コース　養護教育実践系
古村　奈保子

1. はじめに

月経による勉強・運動への影響がある者は 8 割にのぼるとされている。本研究では、養護教諭が実施した月経に関する相談を臨床判断モデル（Tanner, 2006）を用いて４ステップに分け、何に「気づき」、どう「解釈」し、「対応」に生かし「省察」したかを明らかにする。

2. 方法

2024 年に、女子高校生 14 名に対し、月経に関する相談を実施した。一人あたり 1～3 回の相談を実施し、最後に振り返りを行った。実施した内容をプロセスレコードに記述し、臨床判断モデルのステップに分けた。各ステップのカテゴリーの妥当性を養護教諭 6 名と確認した。

３．結果

各臨床判断モデルのカテゴリーには、【月経について】【本人について】【月経のケアについて（鎮痛剤について含む）】【婦人科受診について】【母親からの影響（母子関係含む）】【家庭環境】【環境（関係作り含む）】のコアカテゴリで構築されていた。対象者は最後に、月経用品を試した、セルフケア、周りと月経について話した、生活習慣の見直し、月経に対する考えが変わったと答え、月経について話しをしてよかったと答えた者がほとんどであった。

４．考察

養護教諭が月経に関する相談を実施することにより、学校生活を快適に過ごすことができるようになるだけでなく、自分の健康状態に関心を持ち、健康上の課題を自覚し解決（改善）するための方策を一緒に考える機会となる。